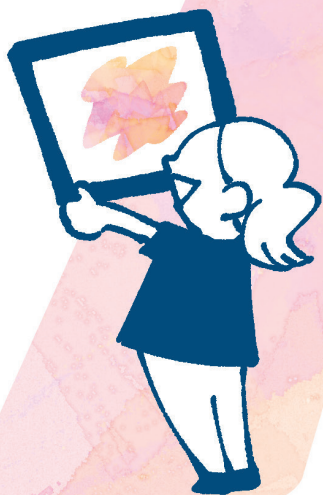


令和 6 年度 アイサ事業報告書



はじめに

アール・ブリュットインフォメーション&サポートセンター（略称：アイサ）は、2012年6月に社会福祉法人グロー内に開設されました。障害のある人の芸術文化活動に関わる相談支援や人材育成、ネットワークづくり、鑑賞や表現活動などに参加する機会の確保、情報の収集と発信などを行っています。

これら、障害のある人の芸術文化活動支援をさらに推進するために、福祉施設と文化施設等が連携して事業を行うこと、また文化施設等に出向いて相談等の支援を行うことが求められています。

われわれアイサでも、従来から行っている公共文化ホールでの鑑賞サポート研修に加えて、障害のある人の実演団体と支援者である福祉施設、そして公共文化ホールが協働で行う舞台発表研修を新たにスタートさせました。

今年度は、事業者による障害のある人への合理的配慮の提供が義務化され、芸術文化の分野でもこれまで以上に様々な試みが始まっています。

本報告書が障害者の芸術文化活動とその支援現場で役立てられることを願っています。

2025年3月

社会福祉法人グロー（GLOW）～生きることが光になる～
アール・ブリュットインフォメーション&サポートセンター

もくじ

はじめに	1
もくじ	2
アイサの事業について	3



1. 芸術活動支援のためのプログラム

①鑑賞サポート研修	4
②オンライン研修	6
③舞台発表研修	10



2. 第21回滋賀県施設・学校合同企画展

ing… ～障害のある人の進行形～	12
-------------------------	----



3. バリアフリー映画会



4. ボーダレス・アートミュージアム NO-MA の鑑賞サポート



5. 障害者の芸術活動に関する訪問調査



6. 相談支援



7. 情報発信



8. 協力委員会

一年を終えて	27
--------------	----

●本文中の略語について

アイサ：アール・ブリュット インフォメーション&サポートセンター

NO-MA：ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

グロー：社会福祉法人グロー（GLOW）

●本文中の表記について

障害福祉サービス事業所等の利用者について、利用者さん、ご利用者、利用者様等、様々な表現があるが本書では利用者に統一

*滋賀県障害者芸術文化活動支援センター

2017年から「障害者芸術文化活動普及支援事業」（厚生労働省事業）が実施されています。地域で障害のある人が芸術文化を享受し、多様な活動ができるよう支援する体制を全国展開する事業です。社会福祉法人グロー（GLOW）は滋賀県の障害者芸術文化活動支援センター（アイサ）を担っています。

アイサの事業について

アイサが行う事業には、相談、ネットワークづくり、芸術文化活動に参加する機会づくり、研修会の開催、情報発信という5つの役割があります。それぞれの事業がどんな役割りを担っているのかを、各事業の最初のページに下記のアイコンで示しています。

相談

Consulting

作品や展覧会をつくること、発表、鑑賞などに関する相談支援を行っています。

情報発信

Information

アイサのウェブサイトで、研修会、作品公募、展覧会、発表会など障害のある人の表現活動に関する情報を発信しています。

ネットワークづくり

Network

障害のある人、その家族、福祉関係者、芸術の専門家、地域の人びとなど分野や領域を超えたネットワークづくりに取り組んでいます。

5つの アイコン



研修会の開催

Workshop

障害のある人の美術や舞台表現を支援する人、活動に関心のある人たちを対象に研修会を開催しています。

芸術文化活動に参加する機会づくり

Enjoy

障害のある人が美術や舞台表現等に参加する場づくりを行っています。

1

芸術活動支援のためのプログラム



① 鑑賞サポート研修

目的

アイサでは、2024年4月1日から事業者による障害のある人への合理的配慮の提供が義務化されたことに伴い、合理的配慮について福祉関係者、文化芸術関係者、そして行政が共に考えていく必要があると考えました。今年度は、京都を拠点とする劇団「ヨーロッパ企画」が実践しているバリアフリー字幕や音声ガイドの提供といった鑑賞サポートを通して、劇場での合理的配慮について学び、考える研修を実施しました。

※合理的配慮…障害者の権利をはばむ社会的障壁（バリア）を除くために、個々の状況に応じて必要かつ適当な、変更や調整をさす言葉です。

開催概要

アイサ人材研修「舞台演劇公演における“合理的配慮”の取り組みを考える」(2日間)

会場：栗東芸術文化会館ささら
中ホール/研修室

1日目：2024年8月29日(木) 13:30～16:00

- (1) 研修について
- (2) 障害特性について
- (3) 鑑賞サポートについて
- (4) ヨーロッパ企画のバリアフリー字幕、音声ガイド制作について

2日目：8月30日(金) 17:45～21:00

- (1) バリアフリー字幕体験
ヨーロッパ企画公演
「来てけつかるべき新世界」ゲネプロ鑑賞
- (2) 研修のふりかえり

講師：山上庄子(Palabra株式会社)

渡辺さよ(ヨーロッパ企画)

大平眞太郎(社会福祉法人グロー)

参加者：延べ28名



レポート

この研修では、合理的配慮の取り組みを考えるということをテーマに設定したこともあり、興味関心のある一般の参加者だけでなく、文化施設や劇団関係者など文化芸術に携わる方が多く参加されました。

1日目はパラブラの山上庄子さんと、ヨーロッパ企画の渡辺さん、社会福祉法人グロー福祉事業部部長の大平眞太郎さんを講師に招き、それぞれに講義を行っていただきました。

大平さんからは、障害のある人への配慮や対応の基本について、障害の特性に合ったコミュニケーションの取り方についてお話いただきました。そして、障害の有無や種別に関わらず、相手を尊重した対応を心掛けることが大切だということを学びました。

山上さんは、映画のバリアフリー字幕・音声ガイドの制作をはじめ、演劇など舞台芸術作品のバリアフリー化などに携わっておられ、今回の研修では、特に舞台芸術公演における鑑賞サポートについてお話いただきました。過去の事例を紹介いただくとともに、実際に鑑賞サポートを利用される方にはどのようなニーズがあるのかということもお話があり、参加者のみなさんも真剣に聞き入っておられました。

後半は、ヨーロッパ企画で鑑賞サポートを担当されている渡辺さんに加わっていただき、山上さん、渡辺さんのお二人から、ヨーロッパ企画で取り組んでいる鑑賞サポートについて、また鑑賞サポートを取り入れようと思ったきっかけなどをお話いただきました。実際に鑑賞サポートに取り組んでいる劇団からお話を聞く大変貴重な機会になりました。

2日目は、ヨーロッパ企画第43回公演「来てけつかるべき新世界」のゲネプロを、字幕タブレットを利用して鑑賞しました。また、鑑賞後には参加者で研修の振り返りを行いました。

参加者は初めて字幕タブレットを使用する方が多く、振り返りのなかでは、「演劇を鑑賞しながらタブレットの字幕を見るということは少し煩わしく感じる」、「情報が多く疲れてしまう」という意見や、「鑑賞サポートを行っても全く同じ鑑賞体験にはならないことを心配に思う」といった意見も聞かれました。

山上さんより、実際に字幕タブレットを利用される方の多くは、聴覚から得られる情報がない、または少ない方が多く、違ったとらえ方になるということや、情報を伝えるということが大切だと丁寧にご説明いただきました。

※ゲネプロ…演劇やコンサートで使う用語で、本番と同じ条件で行う通し稽古のことをいいます。

振り返り

この研修を通して、福祉関係者、文化施設関係者、劇団関係者など多様な立場の方による意見交換が行われました。これにより、合理的配慮について福祉と文化芸術の両視点から考える貴重な機会が提供されたと考えます。

特に、鑑賞サポートを導入している劇団の様子を見学し、直接お話を聞いたことは、今後の取り組みに対する参加者の意欲を高めるものとなりました。字幕タブレットや音声ガイドに加え、台本の貸出といった具体的なサポート例は、すぐに取り入れることが可能な例として、参加者の今後の取り組みへのヒントになったのではないのでしょうか。

② オンライン研修 「芸術活動支援のためのプログラム」

目的

今年度は、オンライン研修「芸術活動支援のためのプログラム」において、表現（芸術）活動と知的財産権について学ぶ2つのプログラムを実施しました。障害のある人の芸術活動を支援する方や関心のある方が、事例や学びから見識を広げ、それぞれの事業所等で学びを生かした障害者の芸術文化活動に取り組めるようになることを目指しました。

開催概要

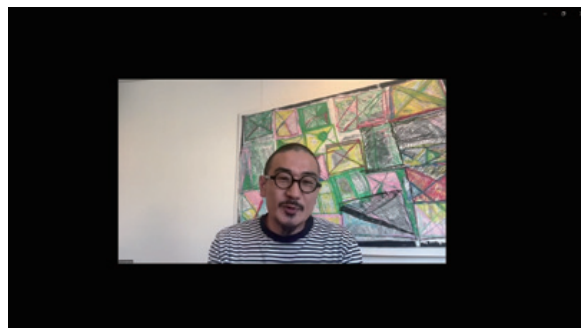
第1回 表現（芸術）活動の支援ってどうするの？

日時：2024年11月13日（水）13:30～15:00

講師：小川菜緒（一般社団法人no-de（ノード）アトリエヲト）

福森創（社会福祉法人太陽会しょうぶ学園）

参加者数：84名

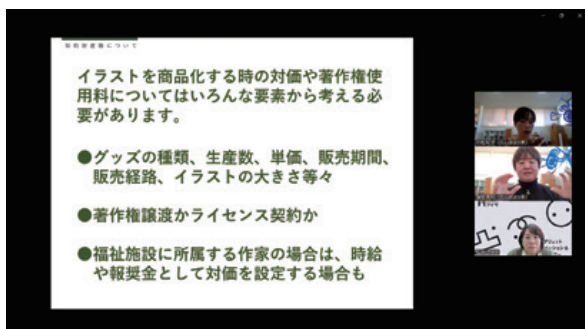


第2回 身近な事例から学ぶ、知的財産権

日時：12月5日（木）13:30～15:00

講師：後安美紀、小松紀子（一般財団法人たんぼぼの家）

参加者数：47名



レポート

第1回 表現(芸術)活動の支援って どうするの？

第1回の研修では、表現（芸術）活動に取り組む2つの団体から、それぞれの事業所の取り組み事例をお話いただきました。

まず初めに小川菜緒さんから、アトリエヲの取り組みをお話いただきました。アトリエヲは、2022年に表現活動を取り組みの中心に据えて立ち上げられた、就労継続支援B型の事業所です。『『自分らしく生きる』を支援する』ことを大切にされており、アトリエヲらしい表現活動をされる方として、推し活のために自分でスマホのデザインをされた方、また、その方に触発されて、あこがれていたネイルアートを始められた方の事例についてお話をいただきました。アートワークショップやマルシェ出店なども行われ、それが新しい表現に出会う場、交流の場にもなっていると話されました。

続いて福森創さんから、しょうぶ学園での事例をお話いただきました。しょうぶ学園は、1973年に開設され、今年で52年目の施設です。当初は教育や訓練を目指す社会復帰の施設として設立されましたが、1985年頃から工房しょうぶを設立し「与えられる側から作り出す側に」を目標に、下請け生産からオリジナルの木工、陶芸、染め、刺繍、和紙の活動に転換。その後、芸術・表現活動に広がり、ジャンルにとらわれない活動を行うようになりました。工房しょうぶの特徴として、支援者も利用者も表現者であることをあげられ、ものづくりを行うという同じ

方向を向きながら、できるかぎりフラットな関係で個々の強みを生かした制作に向かいたいと話されました。

その後の質疑応答では、スタッフの専門性の有無やマネジメント、利用者への制作時の声かけ方法など、具体的な質問もあり、参加者それぞれの現場で生かせる学びの機会となりました。

第2回 身近な事例から学ぶ、知的財産権

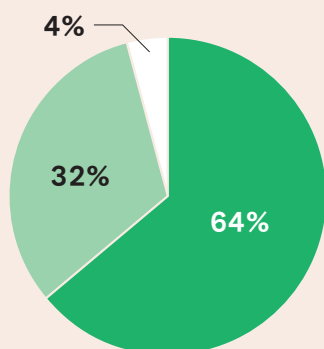
第2回は、一般財団法人たんぼの家の後安美紀さん、小松紀子さんを講師に招き、知的財産権について学ぶ研修を実施しました。そもそも著作権とは何かという基本知識について、よくある疑問などをあげながら講義いただいた後、「アニメのキャラや絵、本などを見ながら絵を描いてもよい?」「施設で描かれた作品が増えてきたけど、処分してもいいの?」「SNSで公開するときに気を付けること」など、具体的な事例をもとに、考え方や対応方法についてお話をいただきました。

質疑応答でも、「チラシ背景に使う場合も承諾を書面でとる必要があるか」「著作権の対価についての決め方」など、現場で疑問に思っていることについての質問が上がりました。

展示やグッズ制作など、著作権にかかわることはケースバイケースであることも多く、一概にこれが正しいと言い切れないこともあります。作家・利用者と施設・支援者などで話しながら確認したり決めたりすることが大切だと、改めて学ぶ機会になりました。

アンケート (一部抜粋)

▶ 第1回「表現(芸術)活動の支援ってどうするの?」(回答率63.1%)



■ とてもよい
■ よい
■ ふつう

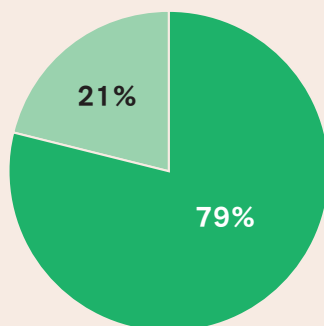
□ 具体的に気づきや学びになったこと

- まだまだ、訓練や教育という方に視点がいきがちだと考えさせられた。
- 質疑応答の中で、具体的な人員配置などについて触れられていた事、参考になります。また、職員の日常的な業務、販路の捻出、発表の場の創出、横のつながりなど、活動する上での関係機関とどのようにつながっているのか、聞いてみたいです。
- 利用者さんが、作品が完成した後ゴミ箱に捨てる、という話を聞いて、作品を作ること、自己表現が利用者さんのやりたいことなのだと身に沁みました。

□ 今後の取り組みにつなげられそうなこと

- 工房しょうぶさんが今に至るまでには40年かかったという話を聞いて、焦ってはいけないんだと改めて思いました。また、ヲトさんのように、新しい事業所でも、やり方次第で地域に根を伸ばしていけるのだということを知り、自信になりました。もっと工夫してみようと思います。
- 利用者の自由な創作に対し、支援者がそれを活かす工夫をもっとして見るべきだと思った。

▶ 第2回「身近な事例から学ぶ、知的財産権」(回答率：59.5%)



■ とてもよい
■ よい

□ 具体的に気づきや学びになったこと

- 実際に活動されている事業所の事例を聞き、具体性が分かり、とても参考になりました。作者への報酬割合や、作品使用の目的、事業所として整備していくことなど、課題解決の糸口となりそうです。
- 支援者のリスクを回避するためだけではなく、表現したい、発信したい、何かしたい、楽しみたい、という利用者さんの想いを尊重するためにこそ、著作権同意の丁寧な取り組みを重ねる必要があるのだと再認識できた。
- 著作権について、権利を守るということばかり考えていたので、「文化発展の寄与」というところはとても勉強になった。

□ 今後の取り組みにつなげられそうなこと

- 作品を商品化し販売する機会を考えることで、施設内で創造活動をおこなう利用者を増やすことができるのではないかと思います。
- 創作に関する権利を守りながら展覧会を行ったり、今後作品や製品販売の際の利用者の方への還元金などについても事業所内で見直しができそう。
- 他人の権利を侵害していないかというところにかかなり気を取られていたので、今後はもっと自由なアート活動が出来そうです。

振り返り

今年度はアート活動支援にかかる2回のオンライン研修を実施しました。

第1回では、事業所を開設されて3年目のアトリエエトと、52年目のしょうぶ学園という活動歴のちがう2つの事業所の取り組み事例をお話いただきました。この2つの施設の取り組みをお話いただくことは、これからアート活動に取り組もうと考えている事業所、また、現在アート活動に取り組まれている事業所、いずれにとっても参考になるのではと考えたためです。異なるそれぞれの施設での取り組みや、いずれも「その人らしさ」を大切にしているというお話は、実際の活動方法だけでなく、アート活動を取り入れる意味や意義についても考える機会になったように感じました。

また、第2回の知的財産権について学ぶ研修では、福祉施設での具体例をあげてお話しいただけたことで、まさに「身近な事例から学ぶ」機会となりました。「職員間で共有したい」「身近なところから始めてみようと思う」という感想もあり、著作権について考えること、取り組むことへのハードルが下がり、実際の取り組みにつながりやすい内容だったと感じています。

2つの研修の参加者アンケートから、研修内容の満足度は高く、他施設の事例や権利について学ぶ機会のニーズの高さもうかがえます。一方で、「今後の取り組みに繋がれそうなのがあるか」という問いに対し、「とてもあった」「あった」「機会があれば取り組みそう」と回答は79%に留まりました。目標としていた8割には届かず、「具体的な支援方法をもっと知りたいと思った」という意見もあるなど、もう一步踏み込んだ内容へのニーズがあることもわかりました。

今年度は例年よりも参加者が多く、「研修をどこで知ったか」という質問には、「チラシ」のほか「講師所属施設のSNS」を見て研修に申し込みをしたという方が多くおられました。また、「無料オンラインは、県外から気軽に参加できたのでありがたい」という意見もあり、気になる施設の事例や権利について学びたい方にとっては、オンラインで研修を実施することが、参加しやすさにつながっていることを改めて感じました。

コロナ禍以降実施しているオンラインでの研修ですが、今後も内容にあわせて、対面の研修と組み合わせながら実施していきたいと考えます。

③ 舞台発表研修

目的

障害者の芸術団体や、彼らを支援する福祉施設の担当者が、日頃の活動に加えて、自ら主催して作品を発表することは簡単なことではありません。アイサでは、舞台表現活動を行う障害当事者とその支援者、舞台業務に従事する専門家とが、ネットワークを形成しながら、成果発表に向けてお互いに学び合うことを目的として新たな研修をスタートしました。この研修は実行委員会形式で、令和6年度から7年度にかけて2か年で実施します。成果発表として公演を実施し、障害のある人の舞台発表の機会を生み出すこと、障害のある人の芸術活動への社会の関心を高めることも同時に目的とします。

開催概要

研修では、参加者（実行委員）が成果発表会の企画、鑑賞サポートなどの情報保障、チラシやウェブ・SNSを利用した広報等について、それぞれの立場から学び合います。また、振り返りを行うことで成果や課題を把握し、今後の障害者団体による舞台発表に繋がるノウハウを蓄積していきます。

実行委員会の構成：

劇団まちプロ一座、演劇集団deer deep、スキップハート（以上、実演団体）、
守山市民ホール（文化施設）、藤野裕美子（美術作家／アイサ協力委員）

第1回実行委員会

日時：2025年1月22日（水）13:00～14:00

オンライン（ZOOM）にて実施

- (1) 自己紹介
- (2) 事業説明
- (3) 次回実行委員会の説明（劇団まちプロ一座より）

第2回実行委員会

日時：1月26日（日）13:30～17:00

会場：浜大津スカイプラザ

「共生のまち演劇プロジェクト第8回公演」を鑑賞

第3回実行委員会

日時：3月15日（土）13:30～16:00

会場：守山市民ホール 小ホール

- (1) 研修「舞台のしくみ（舞台・照明・音響）について」 講師：小森慎也氏（守山市民ホール副館長）
- (2) 来年度に向けての意見交換

参加者：延べ29名

レポート

全7回の研修のうち、令和6年度は3回を実施しました。

1回目は顔合わせと研修の企画説明をオンラインで行いました。今回参加する実演団体のうち、甲賀市を拠点とする〈演劇集団deer deep〉は、障がいのある人となない人が共に創る共生の舞台芸術を目指して、多種多様なメンバーで演劇を身近に感じてもらえるように活動しています。また、演劇祭を主体的に実施するなど、手弁当ながらも制作力を備えた劇団です。最近ではアイサの実施する鑑賞サポート研修に参加するなど、多方向にアンテナを張って活動されている印象です。〈劇団まちプロ座〉は2003年に設立、社会福祉法人共生シンフォニー まちかどプロジェクト(大津市)に所属しています。「障害者の生(なま)の声を届けたい」と、障害当事者の実体験や日々感じていることなどを、オリジナルの台本で、大・小道具なども自分たちで創り上げています。年1回自主公演を実施していますが、広報まで手が回らないのが悩みとのこと。〈スキップハート〉はダウン症の子ども6人によるダンスグループでお母さんたちが運営を担い、近江八幡を拠点に活動しています。2012年、子どもたちが年少・年中のときに活動をスタートし、ずっと同じメンバーで活動してきました。2024年現在、養護学校高等部1年と2年になり、活動歴を重ねてきて、もっと舞台のことを知りたいと参加を希望されました。また、アイサでは文化施設との連携にも力を入れており、この研修では守山市民ホールに参画いただいています。

第2回実行委員会では、劇団まちプロ座が大津の市民劇団、グループ「橋」と開催する「共生のまち演劇プロジェクト第8回公演」を鑑賞しました。車椅子の演者が小劇場で演技するときの注意点や工夫など、参考になることの多い公演でした。

第3回実行委員会は、次年度に行う成果発

表公演の会場での舞台研修と次年度に向けての意見交換を行いました。

舞台研修では、照明や音響の効果や、舞台道具の仕組みについて、実際の舞台装置を使って解説いただきました。また、照明や音響など舞台スタッフに要望を伝える台本の書き方などについても、わかりやすく教えていただきました。参加したみなさんからは、「照明視覚効果の技法やホールスタッフさんとのコミュニケーション方法、スタッフさんの思いを直接聞いたことがよかった」「シーンのイメージを伝えて、照明、音響の方に作ってもらう、信頼関係で成り立っていることを教えていただきました」「参加されている方との繋がりもできて貴重な時間でした」といった感想が聞かれました。

次年度も、みなさんと協力して取り組んでいきたいと思います。



2

第21回滋賀県施設・学校合同企画展

ing…～障害のある人の進行形～

目的

本展は、滋賀県内の障害福祉施設や学校、地域の造形教室などと、ボーダレス・アートミュージアムNO-MAが実行委員会を組織し、企画、展示を行う展覧会です。2004年のNO-MAの開館以来毎年開催し、今年で第21回となりました。実行委員は普段、出展者の日々の活動に寄り添う支援者であり、支援者ならではの視点で作者の表現や作品の魅力を引き出す展示を構成します。

障害のある人の作品を発表する機会の創出、造形活動を担当する支援者や教員の交流を図ることで、より質の高い支援を目指します。また、本展の取り組みを発信することによって、障害のある人の芸術活動への社会の関心を高めることを目的としています。

開催概要

前期：2024年12月21日(土)～2025年1月26日(日)

後期：2025年2月1日(土)～3月2日(日)

会場：ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

出展施設等：〔前期〕アトリエひこうきぐも／おうみ福祉会きみいろ／合同会社ふくろう／湖南ダンス
※五十音順、ワークショップ／慈円／重症心身障がい者通園施設せいふう／第2ももスマイル／能
敬称略 登川作業所／バンバン

〔後期〕あうとリーち和泉／救護施設ひのたに園／滋賀県立近江学園／滋賀県立信
楽学園／信楽青年寮／社会就労センターあおぞら／障害者支援事業所いきいき／ス
テップアップ21／第二出会いの家／放課後等デイサービスじょいなす

協力施設：にっこり作業所

アドバイザー：野原健司(美術家)

グラフィックデザイン：上川七菜

出展者：21名と1組

総入館者数：930名

イベント：

▶ **ギャラリートーク&制作公開**

前期：2024年12月21日(土)13:30～16:00

後期：2025年2月1日(土)13:30～16:00

▶ **常設ワークショップ**

- 新聞紙を丸めて恐竜をつくろう！（前期）
- 空き箱で、楽しい気持ちを表現しよう！（前期）
- 折り紙でチューリップと小さな鶴を折ろう（後期）
- あなたの「サメ」を表現しよう！（後期）



前期



後期



実行委員会

第1回実行委員会から第6回まで、①展覧会全体の開催方法の検討→②作品鑑賞→③展示会場の紹介→④展示場所の協議→⑤展示構成の調整→⑥最終調整・やさしい作品ガイド制作と、委員の皆さんと意見交換をしながら展覧会を作り上げました。展覧会終了後、第7回で振り返りを行いました。美術家の野原健司さんにアドバイザーとして参加いただきました。



作品実見(第2回)の様子



作品をNO-MAに持ち寄り展示を検討(第4回)



NO-MAで展示アドバイスをする野原さん



初めての工具にも挑戦(搬入設営)

実行委員の感想

今年初めて参加したのですが、自分たちでゼロから作り上げていくプロセスにびっくりしました。作家さんのよさを感じるままに伝えることができることに感動しました

(合同会社ふくろう・山脇美貴さん)

日頃、他の施設の活動や作品に触れる機会が少ないので、出来るだけ多くの作品に出会い、支援者の皆さんのお話を聞きたいと思い、久しぶりに参加させていただきました(信楽青年寮・石野大助さん)

実行委員として第9回から参加しています。何度参加しても新しい刺激があります。他の施設の方の作品に出会えることが最大の魅力です。どうやって作られたかわからない作品がたくさんあります。展示はうまくいくか怖さもあり、ワクワクもあります。

(能登川作業所・西原祐子さん)

※すべての出展施設に感想を聞き、図録に掲載しました。

振り返り

NO-MAは、2024年、開館20周年を迎えました。初年度から続く本展は、今年で21回目。障害のある人の作品を発表する場としての認知も広がり、作品が生まれる現場で作者に寄り添う支援者にとっても、展示方法などを学ぶ貴重な機会となっています。委員からは「他の施設でどのようにして作品が生まれるのかを知りたかった」「作品の感想を共有したり、一緒に展示方法を考えることが魅力」といった声が聞かれ、横のつながりが生まれることも大きな魅力となっているようです。

しかし、本年度の募集では、新規参加施設は1つのみで、全体でも20施設の参加にとどまりました（昨年は29）。不参加の理由を聞いたところ「現場の人員不足で委員会に出席できない」という声が多く、福祉業界全体が抱える人手不足の問題がここでも感じられました。実行委員会にて対応を協議した結果、「広いスペースを活用して、より工夫を凝らした展示を考えたい」という声が多く、これまで同様、前期と後期に分かれて準備を進めました。展覧会を終えて振り返ると、2階の部屋ごとに壁を立てて、それぞれの世界観を演出した前期、壁一面に作品を展示した後期、それぞれ空間の使い方に工夫が感じられ、広い空間を活用するというチャレンジはある一定の成果を生んだようです。

また、今年度は、より積極的な参加型を意識して実行委員会を進めました。どんなときも事務局案を示すのではなく、委員の協議により決定するようにしました。ポスターやフライヤーをデザインするデザイナーにも参加してもらい、デザインコンセプトを伝えてもらったり、作品に込められている情熱を感じてもらったりしました。図録に



はすべての参加施設の感想を掲載しました。

課題としては、やはり実行委員会に参加する負担が大きかったことです。施設での仕事が終わった後、集まってもらうため、実行委員会は18時30分からとスタートが遅く、意見交換が白熱して終了時間の20時をオーバーしてしまうこともありました。要領よくまとめることが難しい取り組みであることを改めて実感しました。参加型という狙いを実現するため、アンケートや原稿制作をお願いする機会も多く、委員への負担が大きかったことと思います。それでも、設営時に委員同士が笑顔で助け合う姿が見られ、時間をかけて培った横のつながりが垣間見えました。

展覧会初日には、ギャラリートークと公開制作を実施しました。作者自らが作品を説明したり、展示の感想を話してくれたり。その傍らで聞く支援員の顔が、自然と笑顔になるのが印象的でした。当初話す予定がなかった作者が、自らマイクを握り作品の説明を始めた場面もありました。ちょっと高揚したその顔が、次第に自信に満ちたようになり、堂々と話す姿へと変化していきました。この変化こそが、本展を開催する大きな意味だと感じた瞬間でもありました。



3

バリアフリー映画会



目的

芸術文化を鑑賞する機会の創出を目的とし、障害の有無にかかわらず誰もが楽しめる映画鑑賞体験となるよう、様々な鑑賞サポートの実施とバリアフリー映画を上映する映画会を月に1回開催しました。また、映画会を開催することで、バリアフリー映画について周知することも目的としました。

開催概要

毎月1回、彦根市にあるCOZY TOWNにてバリアフリー映画会を実施しました。この映画会では上映する作品すべてをバリアフリー日本語字幕付きで上映し、音声ガイド機器の貸し出しを行いました。

映画の上映だけでなく、8月には点字を学ぶワークショップ、12月には映画出演者によるアフタートーク、また、上映後に茶話会を実施するなど、様々な取り組みもあわせて行いました。



▶ 鑑賞サポート

- ☐ バリアフリー日本語字幕：セリフだけでなく、話者名や効果音、音楽など、耳で聞こえる音声情報を文字化した字幕がスクリーンに表示されます。
- ☐ 音声ガイド：場面や登場人物の動きなど、目から入る情報を言葉で説明したナレーション。本映画会では、UDCast方式に対応した映画を上映しました。
※UDCastはPalabra株式会社の登録商標です。
- ☐ 情報保障：上映前のアナウンスでUDトークによるトーク内容の文字サポートを実施しました。トークイベントの際は、UDトークに加えて手話通訳を実施しました。
- ☐ 客席：会場内はすべて自由席で、いすの移動が可能となっているため、車いすの方もほじょ犬をお連れの方も好きな場所で鑑賞できます。
- ☐ その他：ご要望に応じて、最寄り駅から会場までの誘導を行います。

▶ 来場者数

	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
一般	43	45	37	22	58	24	35	40	50	49	40	443
中学生以下	0	2	0	4	0	0	0	0	0	0	0	6
無料(介助者等)	7	2	4	4	9	1	2	7	5	7	4	54

▶ スケジュール

5月11日	「彼らが本気で編むときは、」
6月8日	「チョコレートな人々」
7月13日	「島々清しゃ」
8月10日	点字ワークショップ 「神在月のこども」
9月14日	「心の傷を癒すということ」
10月12日	「さよなら ぽやマン」
11月9日	「バカ塗りの娘」
12月14日	「ライフ・イズ・クライミング!」 小林幸一郎氏アフタートーク
1月11日	「福田村事件」
2月22日	「あまろっく」
3月8日	「かつぶし」

レポート

今年度はバリアフリー映画会を5月～3月の間、毎月1回開催し、劇映画やドキュメンタリー映画など合計11本の映画を上映しました。

この映画会では様々な鑑賞サポートを実施しています。特にバリアフリー日本語字幕は上映する全ての映画においてスクリーンに投影されるため、鑑賞する誰もが体験することができます。

振り返り

アンケート結果からもわかるように、車いすを利用しているから友人や家族などと自由に席を選んでみる事ができない、視覚や聴覚に障害があるから一緒に映画を楽しめる機会が少ないと映画鑑賞をするなかで困難を感じている方がいるということを改めて実感しました。

文字情報が常にスクリーンにあることで見やすかった、字幕があると嬉しいといった声や、音声ガイドを利用することで情景を想像しやすかった、障害がある家族と一緒に映画を楽しむことができた、といった声があり、このバリアフリー映画会を通じて映画鑑賞を気軽に楽しむことができる機会の提供に繋がったのではないのでしょうか。

参加回数をみると、約7割の方が2回以上映画会に参加されていました。その反面、はじめて映画会に参加したという方も3割程度みられ、上映する映画の内容からこの映画会を知り、来場される方も多くおられたのではないかと思います。

この映画会では、誰もが映画鑑賞を楽しむことができることを目的にすると同時に、色々な人にバリアフリー映画について知ってもらいたいことも目的としています。様々な理由からこの映画会に足を運び、バリアフリー映画を体験できる機会を提供できたのではないかと考えます。

映画会に参加し、「様々なサポートを必要とされている方がいることを知った」という方や「このような取り組みがあるなんて知らなかった」「バリア

フリー映画というものを初めて知った」という方も多くおられました。バリアフリー映画会というイベント名で実施すると、「障害はないが参加してもよいか?」という問い合わせをいただくことも少なくありませんでしたが、映画鑑賞を通して、バリアフリー映画が障害のある人やその他のサポートを必要とされている方だけに作られたものではなく、誰もが映画を楽しむ方法の一つであることを知っていただくきっかけになっていれば幸いです。

今後もアイサでは、バリアフリー映画の上映以外にも芸術鑑賞の機会における鑑賞サポートのニーズの把握に努め、障害の有無に関わらず芸術文化活動を楽しむ機会の創出につなげたいと思います。



アンケート結果

▶ 参加者のお住まいの地域(延べ)

滋賀県内	386
滋賀県外	12

▶ 参加者の年齢(延べ)

12歳以下	0	40代	25
13～19歳	2	50代	51
20代	6	60代	98
30代	9	70代以上	211

▶ 参加回数

参加回数	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
はじめて	11	15	5	5	12	2	5	14	26	22	3	120
2～4回	17	11	11	5	21	9	6	9	12	12	18	131
5回以上	13	14	14	12	20	10	10	11	11	11	11	137

▶ 参加者の声(アンケート結果より一部抜粋)

- 聴覚障害の主人と映画を楽しむ機会が持てました。また利用させていただきたいです。
- 車いす使用の連れ合いと、となりでみるのができて良かったです。
- 初めてバリアフリー映画に参加してみて、いろんな方々が来られていると思いました。
- いすを移動していただいて、連れ合いと隣で映画を鑑賞することができ、良かったです。
- 音声ガイドを初めて利用・体験しましたが目を閉じても様子がよくわかりました。
- 字幕は耳が聞こえていても分かりやすかったし、音声ガイドは視覚情報を説明していて、邪魔に思わなかった。
- 難聴になりマイクがひびく時がありましたが、今回は大丈夫でした。字幕は嬉しいです。

- バリアフリー映画会の参加は初めてでしたが、いつもの映画館とは違っていい体験でした。
- 初めて見ました。すごくおもしろかったです。字幕があり見やすかったです。
- 自分では選ばない作品を観ることができて良かったです。
- これからも映画会を楽しみにしています。
- これからも機会があれば、来たいです。できれば湖南地区での開催をお願いします。
- 以前からチラシを見て関心がありながらも足を運ばずにいました。今回出演している方のファンで、初めての参加となりました。手作り感のある会場にびっくりしましたが、それ以上に参加されている方が映画そのものや月1回の出会いを楽しみにされている様子でよい場(試み)であるように思いました。
- 素敵な映画でした。トークも良かったです。



4

NO-MA企画展における鑑賞サポート



目的

ボーダレス・アートミュージアムNO-MAでは、障害のあるなしに関わらず、「誰もが訪れやすい美術館」を目指し、様々な鑑賞サポートを行っています。そのなかの取り組みとして、見えないことや聞こえないことを前提とした鑑賞方法を展覧会ごとに検討し、提供することに努めています。

概要

▶ 文字情報に対するサポート

文字情報の点訳

作者紹介文やごあいさつ文などの文字情報の点訳を提供しています。

音声読み上げ対応

音声読み上げ機能に対応するテキストデータを提供しています。

やさしい作品ガイド

誰にとってもわかりやすい情報提供を目指し、ごあいさつ文や作家紹介文などの文字情報を、やさしい作品ガイドとして別に作成しています。このやさしい作品ガイドは、複雑な表現を避けた簡単な単語や言い回しを使用し、シンプルな構文で構成されています。また視覚的な見せ方も工夫した作品ガイドです。

▶ 作品に対するサポート

触図の作成

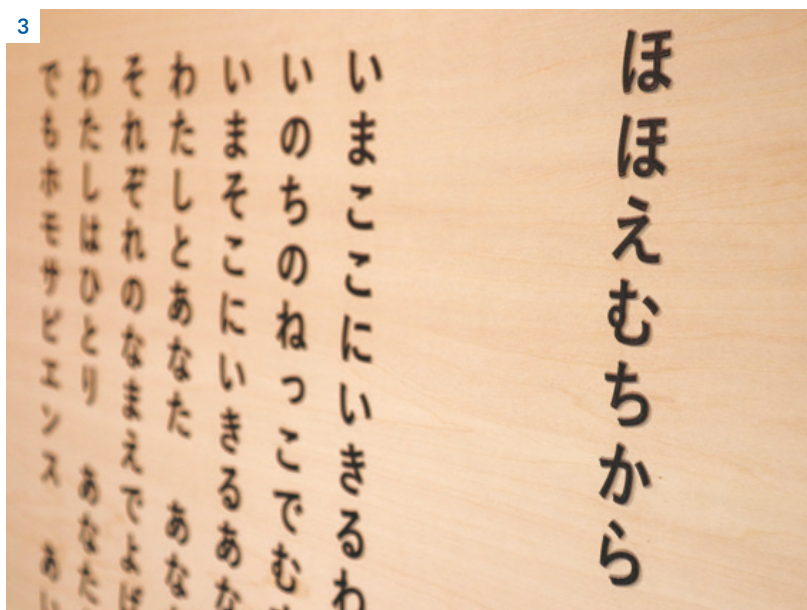
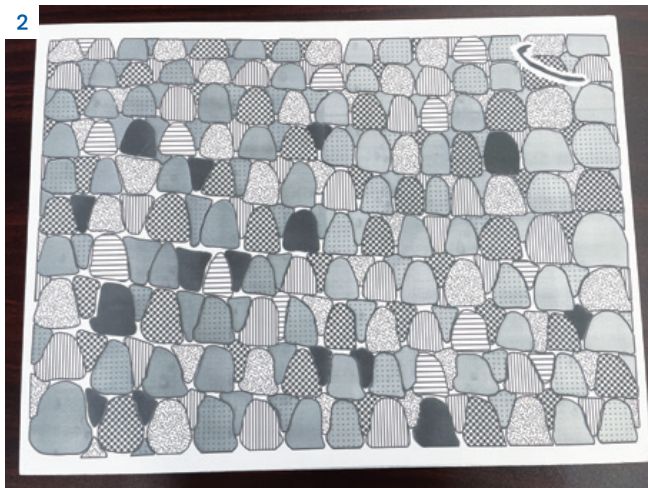
さわって鑑賞することが難しい作品は、特殊な立体コピー技術を用いて触図を作成しています。

さわって鑑賞する

頑丈な立体作品や、陶器の作品はさわっていただけるよう展示方法を工夫しています。さわって鑑賞することが難しく、触図の作成も難しい作品については、作品レプリカの作成や、追体験ができるワークショップを実施しています。

▶ その他のサポート

企画展において、音声作品にとって重要な意味をもつ作品に対しては、聞こえないことを前提とした鑑賞方法の提供に取り組んでいます。



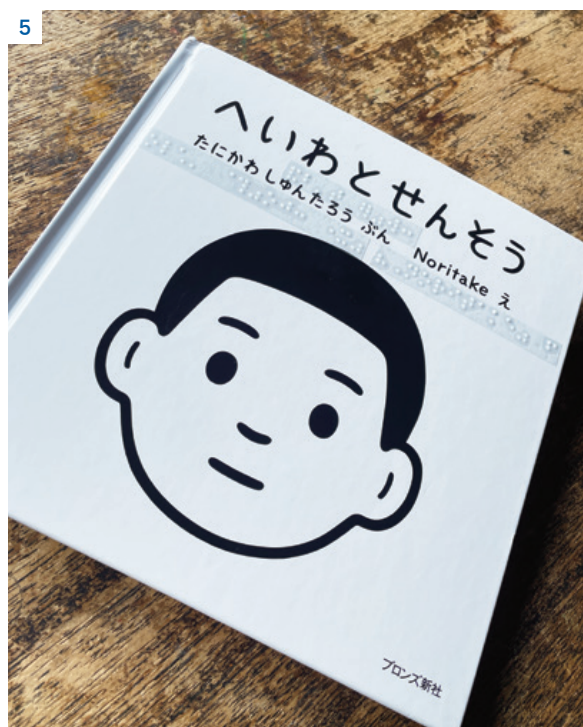
1_「ボーダレス!作家たちの今と回想録」展 喜舎場盛也「ベル」(部分)

2_「ボーダレス!作家たちの今と回想録」展 喜舎場盛也「ベル」の触図

3_「ボーダレス—限界とあわい—」展 詩の文字を凹凸で表現

4_「ボーダレス!作家たちの今と回想録」展 点字テキスト

5_「ボーダレス—限界とあわい—」展 絵本に点字シートを貼付



レポート

今年度は、「人生はボーダレス! 作家たちの今と回想録」、「ボーダレス—限界とあわい—」の2つの企画展において様々な鑑賞サポートを実施しました。それぞれの展覧会で提供した鑑賞サポートを抜粋して紹介します。

「人生はボーダレス!」展では、展示する作品の中から3作家4作品の絵画作品の触図を作成しました。

触図を制作する際には、作品の魅力をどう伝えるか、何を伝えたいか、ということを検討します。たとえば、喜舎場盛也さんの「ベル」は色鮮やかな作品で、さわって鑑賞する際に、作品の色合いをどのように伝えるかという点が課題でした。触図を制作していただく方と相談し、ふくらむ厚さを変えたり、印刷する模様を変えることで、さわった時の感触の違いから色の違いを表現し

ました。

さらに、作品以外に写真も多く展示していたため、写真を展示する際のサポートが必要と考えました。写真の情報を伝える方法や説明テキストの作り方を滋賀県視覚障害者センターに相談し、作成した文字情報は点訳と、音声読み上げ対応データとして提供しました。

「ボーダレス—限界とあわい—」展では、作品と併せて詩（言葉）や音（音楽）を展示しました。詩は朗読した音声だけでなく、文字を凹凸で表現することで、詩をさわる展示も行いました。

絵本の展示では、朗読音声を聞くことができるポータブルプレーヤーと、シールタイプの点訳テキストを貼った絵本を用意しました。音声を聞きながら、絵本に貼られた点字を読み、より絵本を読むことに近い体験ができる展示を目指しました。

振り返り

アイサでは、映画鑑賞や舞台芸術公演での鑑賞サポートだけでなく、NO-MA企画展での鑑賞サポートにも取り組んでいます。展覧会の規模、作品の種類や内容によって提供できる鑑賞サポートは異なりますが、都度どのような鑑賞サポートを実施できるか、またどのような鑑賞サポートを行うことでより展覧会を楽しんでいただけるか、ということを考えています。

視覚障害、聴覚障害はもちろん、その他の障害でも、それぞれ障害の程度は異なります。理想は鑑賞者全員に合った鑑賞サポートを提供することですが、現実的に考えて全てにおいてサポートすることは困難です。また、展覧会は必ずしも美術作品だけで構成されているとは限りません。様々な要素（今年度では写真や言葉、音など）も展示空間を構成するうえで用いられることがあり、それぞれに応じた鑑賞サポートを検討することを大切にしていきたいと考えます。

「ボーダレス—限界とあわい—」展でさわれる詩の展示を行い、実際に視覚障害がある方に鑑賞していただいたところ、「さわるができるというのは嬉しいが、点字でないと理解ができない」という意見もありました。

視覚に障害がある鑑賞者に対して、触図やさわれる作品を用意しているから、展覧会内のテキストを点訳した冊子を用意したからといって、目の見える人と全く同じ鑑賞体験ができるという訳ではありません。用意したから鑑賞サポートは提供できている、といった認識にならないよう、鑑賞サポートを考える際は常に振り返りといった意見をもとに検証することが必要であるとあらためて実感しました。

鑑賞サポートの取り組みは一度にすべてを解決できる問題ではありませんが、都度振り返りやフィードバックを行い、よりよい鑑賞体験につなげていきたいと思っています。

5

障害者の芸術活動に関する訪問調査



目的

障害のある人の芸術活動を地域で展開・継続している福祉事業所や団体、学校等の活動に関する実態やニーズを把握するとともに、障害者の芸術文化活動に関する情報を収集し、ネットワークを広げるため、今年度も訪問調査を実施しました。今年度は、県内で音楽やダンスなど舞台芸術活動を実施する団体や、ing展に出展してきた福祉事業所等を中心に調査を行いました。

継続して活動に取り組んでいる団体を訪問し、関係者と直接出会って話を聞くことは、県内における文化芸術活動の現状を把握できるだけでなく、アイサの活動の周知やネットワークの構築による新たな事業の展開につながると考えています。

実施概要

調査対象：芸術文化活動に取り組む障害福祉事業所・団体

調査内容：活動の実態/活動上の課題

調査数：6団体

▶ 訪問調査先(芸術文化活動に取り組む障害福祉事業所・団体)

① NPO法人子育て研究会	守山市	2024年7月20日(土)
② 社会福祉法人青い鳥会 彦根学園	彦根市	2024年8月7日(水)
③ 手話サークルすずらん	大津市	2024年8月7日(水)
④ 社会福祉法人おおつ福祉会 社会就労センターあおぞら	大津市	2024年9月26日(木)
⑤ 一般社団法人とこ kama-moto	野洲市	2024年10月2日(水)
⑥ 社会福祉法人おおつ福祉会 伊香立の杜木輝	大津市	2024年10月4日(金)



2024 年度相談支援活動実績 (2024年4月1日～2025年2月28日)

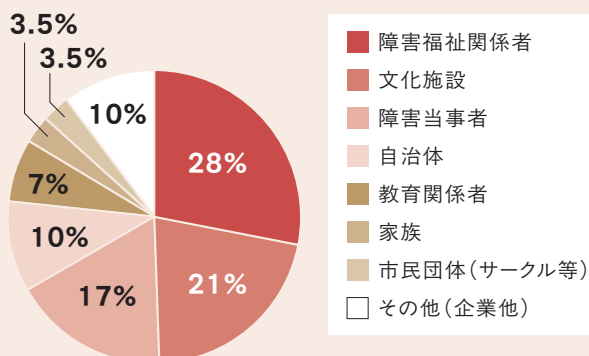
相談件数
29件

相談回数
140回

▶ 相談者別 (件数)

障害福祉関係者 (障害福祉サービス事業者、当事者団体等)	8
文化施設	6
障害当事者	5
自治体	3
教育関係者	2
家族	1
市民団体(サークル等)	1
その他(企業他)	3

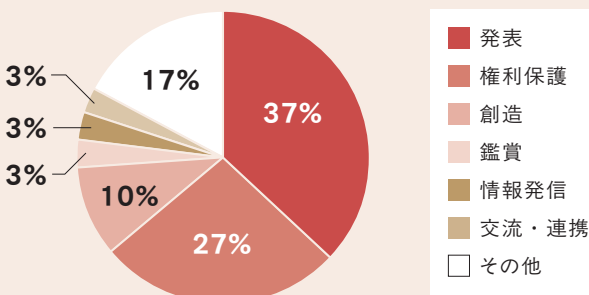
▶ 相談者別



▶ 相談者別 (件数)

発表(発表したい、開催したい、依頼された)	11
権利保護 (二次利用・商品化・販売・作品の取扱全般)	8
創造(創作環境、支援方法等)	3
鑑賞(鑑賞機会、支援方法等)	1
情報発信(取材、広報、見学)	1
交流・連携	1
その他	4

▶ 相談者別



今年度は、2月28日時点で29件の相談活動を行いました。内訳でみると、例年通り障害福祉関係者からの相談が一番多く、展示会の開催に関することや作品の二次利用に関する疑問などの相談が寄せられました。また今年度はついで、文化施設からの相談が多く寄せられました。障害福祉関係者と同じく、展示会の開催に関するもののほか、二次利用に関する作家との取り次ぎや鑑賞サポートに関する相談などもありました。文化施設からアイサへの相談が増えることは、発表や二次利用などで障害のある方の活躍の場、鑑賞の場が広がることにもつ

ながるため、文化施設へのアイサの活動周知を図り、連携を深めたいと思います。

また障害当事者からの相談は、発表機会に関することや、創作など活動ができる場についての情報提供などがありました。

今年度も文化施設や絵画教室の情報収集を目標として掲げていましたが、新たな施設や教室の情報収集を行うことはできませんでした。地域資源や人材等の情報を収集することは、様々な相談に対応するために必要なことだと考えています。継続的に調査を実施し、情報を蓄積、更新できるよう努めたいと考えています。

7

情報発信



ホームページ、メールニュースでの情報発信（2024年4月1日～2025年2月28日）

▶ ホームページ掲載記事数・アクセス数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	計
記事数	13	10	6	10	4	12	20	10	17	5	15	122
アクセス数	1,843	2,659	2,802	2,584	1,902	2,021	2,457	2,168	1,760	1,478	1,658	23,322

※前年度実績(2023年4月1日～2024年3月31日) 掲載記事数：142、アクセス数：22,550

▶ 掲載記事(カテゴリ別)

アイサからのお知らせ	16
イベント・展覧会情報	56
公募情報	36
助成金情報	13
研修・調査等レポート	1
計	122



▶ メールニュース

1回/月

アイサウェブサイト
http://info.art-brut.jp

今年度もアイサに届くイベントや公募情報、助成金情報、各関係団体から掲載依頼のあった情報などをホームページで発信しました。毎月一定数のアクセス数があることから、芸術文化活動のための情報収集に、アイサのホームページが活用されているのではないかと思います。今年度も前年度同様、イベント・展覧会情報、公募情報が多く集まり、掲載しました。研修・調査レポートは、調査の実施不足もあり、1件しか掲載できませんでした。来年度は積極的に調査を実施し、掲載していきたいです。また、掲載依頼が多く届くことから、発信の場としてアイサのホームページが認知されてきているように思います。届いた情報は、迅速にアイサのホームページへアップできるよう、今後も芸術活動

支援において求められている情報を収集し、発信していきます。

メールニュースでは、事業でつながった個人・団体等へ月に1回程度、アイサの研修やイベント案内を発信しました。定期的なメールニュースの配信は、県内における障害者の芸術文化活動への関心を高め、つながった方とのコミュニケーションをとれる機会がつかれると考えています。

また、ホームページ等以外でも、必要なタイミングで情報が届くような環境をつくる工夫が必要です。今後もより多くの方に、必要な情報が届けられるよう、さまざまな方法で情報を発信していきます。そして、障害者本人や支援者が、多様な芸術活動の展開ができるようにサポートしていきます。

8

協力委員会



概要

アイサでは協力委員会を設置し、滋賀県障害者芸術文化活動支援センターの実施事業について助言をいただいています。昨年度に続き、教育、文化、福祉等の分野から6名に委員を務めていただきました。委員会では事業計画や評価指標に対する意見交換と、実施した事業の評価を行っています。

また、今後のアイサの役割に期待することや方向性に関するご意見もいただき、長期的な視点でアイサのあり方を改善していくために欠かせない場となっています。

委員紹介

2024年度協力委員

上村秀裕(甲賀市あいこうか市民ホール)

小石哲也(社会福祉法人共生シンフォニー まちかどプロジェクト 「まちプロ一座」座長)

田中孝史(チームエンパワーメント)

田中好美(精神障害者地域生活支援センター風)

馬場功(滋賀県立八日市養護学校)

藤野裕美子(美術作家)

オブザーバー

二宮薫(滋賀県障害福祉課)

梅村杏奈(滋賀県文化芸術振興課)

実施概要

第1回 2024年8月20日(火)場所：草津市立市民総合交流センター 403会議室

第2回 それぞれの事業において、事業視察を実施

第3回 2025年3月11日(火)場所：草津市立市民総合交流センター 403会議室



第3回協力委員会 抄録

第21回滋賀県施設・学校合同企画展(ing展)について

委員

初めて参加する実行委員、何度も参加経験がある実行委員が混ざって実行委員会を運営されていたが、初めての委員も意見を言しやすい環境になっていたと思う。視察した実行委員会ではやさしい作品ガイドを作成するグループワークに参加したが、意見交換の様子を見ても、委員それぞれがこだわりを持って言葉を選んでいたように思う。

アイサ

意見を言いやすい環境については、参加団体が例年より少なく、より少人数での話し合いの機会が多く持てたことが要因のひとつではないかと思う。やさしい作品ガイドは、事務局で作成するのではなく、作家や作品のことをよく知る実行委員が作るからこそできるものになっていた。

研修について

▶ オンライン研修

委員

表現活動の支援について、あらためて考える機会になった。作家と活動を支援する人の方向性は必ずしも一致するとは限らない。そんな中でどのように目的の達成につなげるか、ということについて考え方を整理できたように思う。(第1回)

知的財産権について、基礎的な説明があったので、よく知らない人にとってもわかりやすい研修になっていた。施設などで展覧会をするときも、権利のことを確認して進めなくてはいけないという気づきになった。(第2回)

アイサ

表現活動を始めて数年の団体と、長年表現活動を続けてこられた団体を講師に招いて研修を実施した。表現活動を始めたい人、継続したい人、広めていきたい人など、参加者にとって様々な考え方のヒントにつながる研修を実施できたのではないかと。知的財産権については、作品を展示する時、販売する時、様々なタイミングで権利について考えなくてはいけない機会がある。そういった権利について、改めて考える機会になったのではないかと思う。

▶ 鑑賞サポート研修

委員

人気の劇団が実際に鑑賞サポートを取り入れているということを知ることができてよかった。また、研修を通して鑑賞サポートを継続的に行う大切さを学んだ。今後も鑑賞サポートの取り組みが広がってほしいと思う。

アイサ

実際に鑑賞サポートを提供している劇団の話を知ることができる貴重な機会になったのではないかと思う。参加者の多くは芸術文化に携わる人だったが、興味関心のある一般の参加者もおられ、様々な立場から合理的配慮や鑑賞サポートについて話し合うことができた。

一年を終えて

2024年4月1日に事業者による障害のある人への合理的配慮の提供が義務化されたことを受け、特に県内の公共ホールなど、芸術文化関係者からアイサへのアプローチが増えた一年でした。その結果、県内の公立文化施設協議会が主催する研修会で、鑑賞サポートの提供について話す機会をいただいたり、社会福祉法人グローが事務局を置く近江八幡市の文化振興審議会や文化会館改築に伴う近江八幡市文化会館あり方検討委員会に参加するなど、障害のある方の芸術文化活動について知っていただく多くの機会をいただきました。

また、今年度はとりわけ、支援センターの機能強化に重点的に取り組み、文化施設等との連携を深めることにより、関係者のネットワークの拡充を図ることができました。

一方で、訪問調査においては昨年の調査数を下回り、また、文化施設への訪問調査は実施できませんでしたが、支援センターの機能強化事業の展開において新たに構築した関係性をもって、今後の個別の訪問、相談支援を行っていきたいと考えています。

また、報告書ではふれませんでした、県内の大学に出講したり、地域住民向けに開催された大学イベントに出展して、アイサやNO-MAのPRを行うなど、地域の方に障害のある人の芸術文化活動について知っていただく取り組みも行いました。

「人と人をつなぐ」「交流の場を設ける」ことには引き続き力を入れて、これまでに生まれたつながりをさらに広げつつ、障害のある人とその関係者のニーズに沿った取り組みを行っていきたいと考えています。

文化施設や実演団体が行う鑑賞サポートについても、具体的な取り組みにつなげられるよう支援を継続していきます。

最後になりましたが、本事業の実施にあたりご協力いただきました皆様に心よりお礼申し上げます。

令和6年度アイサ事業報告書

2025年3月31日発行

[制作・発行]

アール・ブリュット インフォメーション&サポートセンター
社会福祉法人グロー（GLOW）～生きることが光になる～
法人企画局地域共生部
〒521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦4837-2
TEL：0748-46-8118 FAX：0748-46-8228
E-mail：artbrut_info@glow.or.jp
WEB：http://info.art-brut.jp

[発行責任者]

山之内洋（社会福祉法人グロー（GLOW）法人企画局地域共生部部长）

[執筆]

疋田三保、松井裕紀、赤澤誉四郎、藤田爽乃、中瀬未歩
（社会福祉法人グロー（GLOW）法人企画局地域共生部）

[デザイン]

早瀬衣里子

[助成]

令和6年度障害者芸術文化活動支援センター運営費補助金（滋賀県）

